



輝け！北っ子

平成30年1月10日発行

1月号

発行責任者 紺野 宗作

新年あけましておめでとうございます！

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしく申し上げます。

始業式では、一人一人があいさつすることを心がけ、あいさつの飛び交う学校にしてほしいことを話しました。3学期は、各学年とも締めくくりの段階に入ります。子どもたちは、この節目のなかで「今年こそ」と、新しい年の夢を描いたり目標を立てたりしていると思います。目的意識を高く持った子どもほど確かな成長をしていきます。どうか、各家庭でも家族団らんの中で夢や希望についての会話を心がけてほしいと思います。

さて、お正月に「未来を担うこれからの子どもたちには何が必要か」というテーマで様々な立場の方が討論しているテレビ番組を見ました。討論の中では、情報化社会に対応する力などに焦点が当てられ激論が交わされていました。私は、その番組を見ながら、「SNSなどの情報への対応ができて、子ども自身が、自分の人生を自分で切り開くことができるたくましく生きる力を身に付けなければ全く意味がないことだ。」と思いました。

教育で最も大切にしたいことは、子どもの「自立」への営みを支援していくことです。いくら学力があっても「自立」しないで社会にでてしまうと一人で物事を決められない、周りとの関係も築けないということになってしまいます。それでは、社会で生きていけません。「自立」とは具体的には、自分のことは自分で考え自分で行動することができる力です。

学校では、家庭学習の習慣を身につけるために、各学年工夫した家庭学習ファイルを活用しています。このファイルの最終目的は、ファイルがなくても、自ら進んで学習する態度を身に付けていくことです。宿題も、やればよいのではなく親から言われなで自分から進んでできるかどうかを大切にしてほしいと思います。自分から行動できるようになるまでは時間がかかります。学校と家庭が手を取り合って、根気強く子どもを温かく見守っていきたいと思います。

子どものやる気は、好奇心から・・・

「うちの子は、なぜやる気がでないのだろう？」と思うことは誰でもあるでしょう。子どもとは、好奇心がすべてであり、好奇心がなければなかなか行動しないものです。子どもに「がんばれ」と何回励ましてもやる気はそう簡単におきるものではありません。子どものやる気を高めるためには、日常生活の中で、親が好奇心を高める投げかけをすることがコツです。

例えば、今年も盛り上がった箱根駅伝ですが、「箱根ってどこにある？」「107kmってどこからどこまで走る？自分の家からだとだいたいどこまで走ることになる？」と、まずは親自身が興味関心を示し子どもの好奇心を刺激します。日常の何気ない出来事を子どもと会話する中で、疑問に思ったことは親子で調べる習慣をつけるとよいと思います。子どもは様々なことに自分から興味関心が高まってきます。調べるという今はインターネットが便利ですが、子どもは、調べたいことに苦労してとり着くことで達成感を感じます。この達成感がやる気の原因です。インターネットに頼らず、地図帳や辞典などを使いながら親子が一緒になって調べることで、好奇心を多方面に広げながら子どものやる気を育てていきたいものです。

週末読書！やっていますか？

学校では週末読書を勧めています。読書は子どものためによいということは誰でも思っていることです。子ども読書推進法には読書の意義を「子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」と定義されています。しかし、意義が分かったとしても、子どもを読書好きにすることは容易でないことです。

子どもが最初に本に出会うのは、親の読み聞かせです。親に本を読んでもらったことが嬉しい記憶、楽しい記憶として残り本を好きになることが、はじめの一步です。読み聞かせというと小さな子どもにしてあげることというイメージがあるかも知れませんが、高学年でも十分に効果があります。特に家族みんなでふれ合いながら1冊の絵本を囲んでの「家読（うちどく）」は効果的です。今は、高学年や大人が読むような色々なタイプの絵本が出されています。家族で読むことによって好きなジャンルが見つかり、読書好きになる可能性が高くなります。読み聞かせをしなくても、親が読書をしている姿を子どもに見せるのも効果的であると思います。しかし、国語力を向上させるために無理に背伸びした本ばかりを読ませる必要はありません。とにかく本に興味を持たせることが重要です。

哲学者の柄谷行人氏が、読書についてこう語っています。「教養を高めるために読書をするのではなく、困難に立ち向かうときに教養がいるのだ。」子どもが豊かな人生を送る手助けになるように読書好きの子どもを育てたいと思っています。

***家読の感想がたくさん寄せられています**

いつも親の都合で物事を解釈してしまっていますが、子どもの心の中にある思いに目を向けるようにしていきたいです。



自分の育児に余裕がないときに、我慢させてしまうときもあります。おこらないで、ぎゅっとするなど子どもと本当に向き合う大切さを教えてもらいました。

心が温まる1冊でした。「勇気を出してあいさつするといいことあるよ」言ったら「友だちが出来るかも」と嬉しそうにしていました。



一緒に読んでいてとても心に残る一冊でした。大人も子どももあいさつは大切です。あいさつの大切さが親子で分かった本でした。しっかり大きな声で元気にあいさつできる子になるよう、まず親が見本になり親子一緒に頑張っていきたいです。

夜寝る前に読みました。「あなた」の部分で子どもの名前を呼んだら「ちがうよ」といいながらニコニコしながら聞いていました。なんだか家族の心がほっこりする時間となりました。

子どもと交互に本を読みました。普段の音読の際は、渋々読むことが多かったのですが、交互に一緒に読むことで息子も集中して読んでいました。親自身も楽しかったです。

